

症 例 報 告

上下顎左右両側性に埋伏過剰小白歯の出現をみた一例

武田 泰典 黒田 政文 野坂 洋一郎*

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座（主任：鈴木鍾美教授）

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座*（主任：野坂洋一郎教授）

〔受付：1986年4月18日〕

抄録：上下顎左右両側の小白歯部に埋伏過剰歯の出現した成年男子の一症例を報告した。小白歯部の埋伏過剰歯は上顎右側に2歯，同左側に1歯，下顎右側に1歯，同左側に2歯の計6歯であった。これらの埋伏過剰歯のすべては2咬頭性単根であったことから小白歯型（定型歯）と考えられた。上下顎の左右両側性に過剰小白歯の出現をみた症例は過去約50年間に本邦では今回の報告例を含めて7例の記載があり，これらはすべて男性例であった。

Key words : developmental anomalies of the tooth, supernumerary tooth, impacted tooth, human permanent tooth.

I 緒 言

日常の歯科診療において過剰歯に遭遇することはまれでない。この過剰歯は上顎前歯部に最も高頻度に見られており，次いで上顎大臼歯部，下顎小白歯部の順であるといわれているが¹⁾，上顎前歯部を除いてはその好発部位は報告者により異なる²⁾。通常，一個体における過剰歯の数は1～2歯であるが，まれには一個体で4～18歯の過剰歯出現例も報告されている。このような多数の過剰歯の出現をみた例の多くは先天的な系統疾患，とくに骨の系統疾患を合併しており^{3,13)}，健常者に多数の過剰歯をみることはきわめてまれである。

今回筆者らは健常者の上下顎左右両側性に計6歯の埋伏過剰小白歯の出現をみた一例を経験したのでその概要を報告するとともに，併せて

これまでに本邦において報告された同様の症例を渉猟し若干の考察を加えた。

II 症 例

患者は26歳の男性で，上顎左側第一大臼歯と右側犬歯の治療を希望して来院。家族歴に特記すべき事項はなく，また，既往歴にも特記すべき疾患はみられなかった。受診時，全身所見ならびに口腔外所見に著変はなかった。口腔内所見として，上顎右側と下顎左側の第一大臼歯は欠損していたが，これら両歯は齶蝕のために以前に抜去されたとのことであった。しかし，他の歯牙の萌出状態には著変は認められなかった。上顎左側第一大臼歯は失活しており，遠心隣接面から髓床底にまで齶蝕が拡がっていた。また，上顎右側犬歯は生活歯であり，近心隣接面に象牙質齶蝕がみられたが，歯髓の穿孔はな

Impacted supernumerary teeth found in the right and left premolar regions of the maxilla and mandible, Report of a case.

Yasunori TAKEDA, Masafumi KURODA and Yohichiro NOZAKA*

(Department of Oral Pathology and Oral Anatomy I*, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

岩手県盛岡市内丸19-1 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 11: 147-152, 1986

かった。これら上顎左側第一大臼歯と右側犬歯のデンタルX線写真を撮影したところ、上顎左右両側の小白歯部に埋伏過剰歯が認められた。そこでパノラマX線写真撮影を行ったところ、上顎の左右小白歯部に加えて、下顎の左右両側の小白歯部にも埋伏過剰歯がみられた(図1)。すなわち小白歯部の埋伏過剰歯は左側下顎部に2歯、右側下顎部に1歯、左側上顎部に1歯、右側上顎部に2歯の計6歯であった。

上顎右側小白歯部の2歯の埋伏過剰歯はそれぞれ犬歯根尖部と第一・第二小白歯歯根間に位置していた(図1, 2a)。これらの埋伏過剰歯は2咬頭性単根であった。上顎左側小白歯部の埋伏過剰歯は第一・第二小白歯の歯根間に位置し、2咬頭性・単根であった(図1, 2b)。また、下顎右側小白歯部の埋伏過剰歯は第一小白歯の根尖部に位置し、2咬頭性で、単根であった(図1, 2c)。下顎左側小白歯部の埋伏過剰歯は2歯であり、それぞれ第一小白歯の根尖部と第二小白歯の歯根遠心部に位置していた(図1, 2d)。これら下顎左側小白歯部の埋伏過剰歯も2咬頭性で、やはり単根であった。以上の様に、上下顎の左右両側性にみられた小白歯部の6歯の埋伏過剰歯のいずれもが小白歯型を呈していた。

III 考 察

1個体において多数の過剰歯の出現をみることは極めて少ないが、既報告例での多くは骨の系統疾患に合併しており、なかでも鎖骨頭蓋異形成症例では木下ら³⁾が4歯、遠藤ら⁴⁾と宇賀ら⁵⁾が6歯、梶ら⁶⁾と広瀬ら⁷⁾が7歯、本橋ら⁸⁾が9歯、深沢ら⁹⁾が12歯、長坂ら¹⁰⁾、西村ら¹¹⁾、倉科ら¹²⁾が14歯、小松ら¹³⁾が18歯の過剰歯例をそれぞれ報告している。一方、健常者の過剰歯の出現例では1個体における過剰歯数は10歯を越えることはないようである¹⁴⁾。これら過剰歯の多数出現例のうち、左右両側性の出現については栃原²⁰⁾は臼歯部に過剰歯を有する76症例中11例(14.5%)と報告している。これら11例の内訳は上顎小白歯部が1例、上顎大臼歯部が10例となっている。また、佐藤²¹⁾も左右両側性に過剰歯の出現をみた11例を報告しているが、これら11例の過剰歯のいずれもが上顎のみにみられていた。したがって、左右両側性に過剰歯の出現する頻度は下顎にくらべ上顎ではるかに高いと考えられる。今回報告した例は上下顎の左右両側の小白歯部に埋伏した過剰小白歯を有していたが、健常者においてこのような過剰歯の出現をみることは極めてまれであり、表1に示す

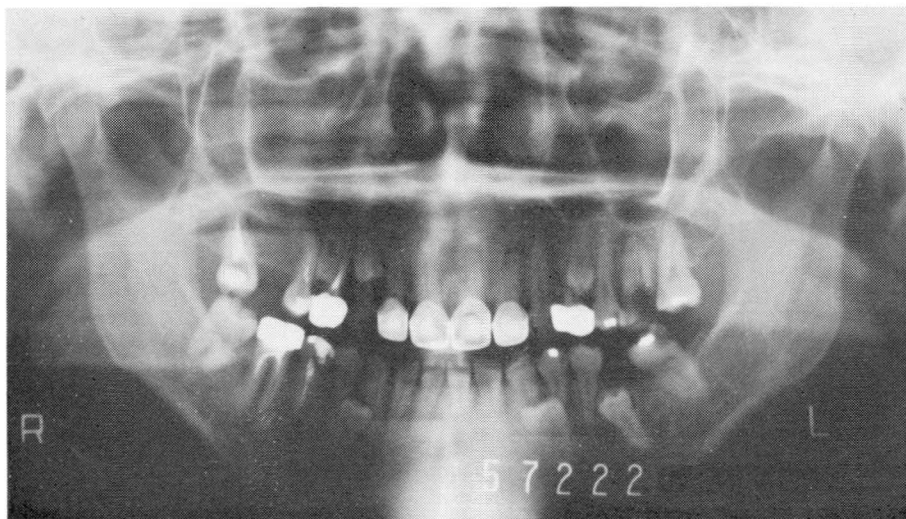


図1 パノラマX線写真。上下顎左右両側の小白歯部に計6本の埋伏過剰歯をみる。

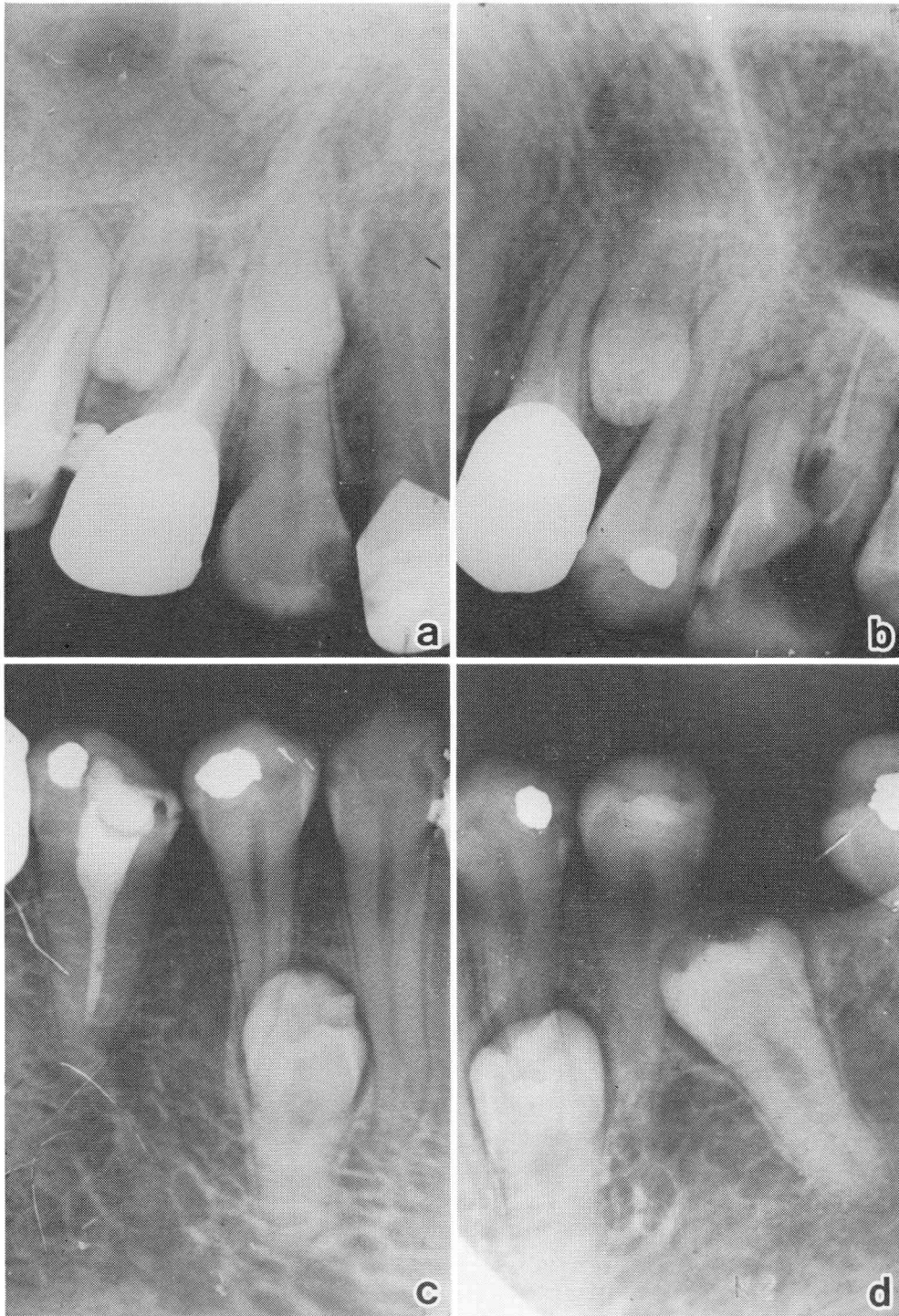


図2 小臼歯部埋伏過剰歯のデンタルX線写真

- (a) 上顎右側小臼歯部 (b) 上顎左側小臼歯部 (c) 下顎右側小臼歯部
(d) 下顎左側小臼歯部

表1 健常者において上下顎左右両側性に出現した過剰小白歯の報告例

報告者	発表年	性	部	位	過剰小白歯の形態
1. 江西 ¹⁴⁾	1933	M	5 4 S S	4 5 S S	円錐歯
2. 久網 ¹⁵⁾	1934	M	5 4 S S	4 5 S S	上顎: 円錐歯 下顎: 小白歯型
3. 木村 ¹⁶⁾	1944	M	4 3 S	3 4 S	$\frac{S S}{S}$ 円錐歯 $\overline{S S}$ 小白歯型
4. 榎本 ¹⁷⁾	1965	M	5 4 S ₁	4 5 S ₁ (S)	$\frac{S_1 S_1}{S_2 S_2}$ 円錐歯 $\overline{S_1 S_1}$ 小白歯型
5. 後藤 ¹⁸⁾	1973	M	5 4 S	4 5 S (S)	$\frac{S S(S)}{S S}$ 円錐歯 小白歯型
6. 小川, 他 ¹⁹⁾	1978	M	5 4 3 S(S)	3 4 5 (S)	$\frac{(S)(S)}{(S)(S)}$ (S) 小白歯型 $\overline{(S)(S)}$ 類小白歯型 $\underline{S(S)}$ 円錐歯
7. 本例	1986	M	5 4 3 (S)(S)	3 4 5 (S)	$\frac{S S S}{S S S}$ 小白歯型

※表中歯式のSは萌出過剰歯, (S)は埋伏過剰歯を示す。

ごとく過去約50年間で本邦では本例を含めて7例が記載されているにすぎない。一般に過剰歯は女性にくらべ男性での出現頻度が高いといわれているが, 上下顎左右両側の小白歯部に過剰歯のみられた7例はすべて男性例であった(表1)。また, 過剰歯の数は5~8歯であり(表1), 1個体あたりの平均過剰歯数は6.3歯であった。過剰歯の萌出状況ではすべてが萌出していたものが3例, 萌出歯と埋伏歯が混在していたものが3例であり, すべてが埋伏していたものは今回報告した例の1例のみであった(表1)。次に埋伏歯の形態についてであるが, すべてが非定型歯であったものが1例, 定型歯と非定型歯の混在したものが5例であり, 本例のようにすべてが定型歯であったものは既報告例中にはみられなかった(表1)。

左右両側性に過剰歯が出現する機序は全く不

明であるが, この様な症例の共通事項として星野²²⁾は次の点を挙げている。すなわち, 1) 歯列が長い, 2) 上下顎智歯がすべて萌出し, かつ智歯の形態が優形である, 3) 口蓋が深い, 4) 過剰歯の多くは非解剖学的形態を呈する, の諸点である。今回報告した症例では歯列の長さとお口蓋の深さは計測出来なかったが, 上下顎の智歯はすべて欠如しており, かつ智歯を抜歯した既往もなかった。また, 過剰歯は6歯とも埋伏していたものの, これらの過剰歯はX線所見から小白歯型と考えられた。以上の様な所見は星野²²⁾の挙げた点と大きく異なる。過剰歯の発現機序については従来から隔世遺伝説, 歯堤および歯胚の分裂と過剰形成説, 奇形説, 組織誘導説などの諸説が唱えられているが, これらは大きく二つの考え方に分けられる²³⁾。すなわち, その一つは系統発生的な復古現象であ

り、他は個体発生学的な形成異常である。これについて藤田²⁾はときとして哺乳類の一般歯式の数を越えた過剰歯の出現をみることがあること、代生歯群より原始性に富むと考えられている乳歯群に過剰歯の出現する頻度は極めて低いことなどより、過剰歯の成因を系統発生学的な復古現象に求めることは出来ないと述べている。一方、過剰歯の成因を個体発生学的な形成異常とする考え方も比較的多くの研究者の支持を受けているが、形成異常の起こる過程を実際に確認し得た例はない。したがって、過剰歯の発現機序は全く不明といわざるを得ないが、藤田²⁾は過剰歯の好発部位に着目し、過剰歯の好発する部位は歯堤の末端部(すなわち、乳歯列末端、代生歯列末端、上顎正中部)の様な歯胚の密度の低い部分であり、通常は退縮すべき第

三歯堤のようなもの(dritt Zahnleiste)が歯胚密度の低い部分で増殖した結果、過剰歯胚を誘導するのではないかと考察している。

IV 結 語

成年男子で上下顎の左右両側の小白歯部に埋伏過剰歯を有した一例を報告した。その観察結果は以下の通りである：

- 1) 小白歯部の埋伏過剰歯は上顎右側に2歯、上顎左側に1歯、下顎右側に1歯、下顎左側に2歯の計6歯であった。
- 2) これらの埋伏過剰歯は2咬頭性・単根で小白歯型(定型歯)と考えられた。
- 3) 上下顎左右両側性に過剰小白歯の出現をみた症例は過去約50年間に本邦で7例の記載があり、これらの症例はすべて男性例であった。

Abstract: A 27-year-old Japanese male with impacted supernumerary teeth found in the right and left premolar regions of both the maxilla and mandible is presented. He had six impacted supernumerary teeth in his premolar regions: two in the maxillary right and one in the maxillary left, and two in the mandibular left and one in the mandibular right. All these impacted supernumerary teeth were premolar in form. A review of the literature in Japan, during the past 50 years, yielded only seven cases with supernumerary teeth in the right and left premolar regions of both maxilla and mandible, including the present case.

文 献

- 1) Stafne, E. C.: Supernumerary teeth. Dent. Cosmos, 74: 653-659, 1932.
- 2) 藤田恒太郎: 人における歯数の異常, 口病誌, 25: 97-106, 1958.
- 3) 木下 功, 原 浩三, 尾崎安之助: 両側鎖骨欠損を伴う全身性骨発育異常症の歯科学的観察, 口病誌, 14: 111-117, 1940.
- 4) 遠藤 孝, 亀谷哲也, 矢野文雄: 上下顎左右側小白歯部に6本の過剰歯を有する稀有なる1例, 口科誌, 18: 121-125, 1969.
- 5) 宇賀春雄, 久野吉雄, 東 俊雄, 金井晴夫, 佐藤田鶴子: 上下顎に多数の歯牙の埋伏が認められた2症例について, 日口外誌, 17: 107-112, 1971.
- 6) 梶 隆一, 連 利隆, 渡辺邦一, 白数力也, 吉田陽彦, 高須 淳: 鎖骨頭蓋異骨症の1例, 日口外誌, 27: 774-779, 1981.
- 7) 広瀬永康, 野原義弘, 桑原誠一, 馬場 弘, 朝倉恒夫, 長岡知之, 後藤俊文: 多くの過剰歯を伴った Cleidocranial dysostosis の1例, 小児歯誌 19: 106-114, 1981.
- 8) 本橋正央, 坂田憲明, 塩野幸一, 鈴木克美, 鈴木君枝, 武井秀光, 工藤逸郎: 鎖骨頭蓋異骨症の2症例について, 小児歯誌, 13: 65-71, 1975.
- 9) 深沢裕文, 長谷川正文, 大村武平, 坂本敏彦: 12歯の埋伏永久過剰歯を有する骨格型下顎前突症の1症例, 口科誌, 32: 173-182, 1983.
- 10) 長坂信夫, 福田 理: 鎖骨頭蓋異骨症の小児歯科学的検索, 歯界展望, 50: 1063-1075, 1977.
- 11) 西村 章, 高木信雄, 塩島 勝: Cleidocranial dysostosis の1例, 歯放, 17: 159-162, 1977.
- 12) 倉科憲治, 武田 進, 滝沢 隆, 北和田信吾, 森田 孝, 長内 剛, 小谷朗: 家族的にみられた Cleidocranial dysostosis. 口科誌, 27: 123-131, 1978.
- 13) 小松利典, 武藤寿孝, 大木保秀, 小林 操, 高原利孝, 高原正明, 甲原玄秋, 今井 裕, 木村孝雪, 佐藤研一: 第3歯堤より発生したと思われる多数過剰埋伏歯の1例, 日口外誌, 32: 138-144, 1986.
- 14) 江西甚良: 成人ノ上下顎小白歯部ニ対称的ニ発見セル過剰歯ノ一例, 齒科月報, 13: 23, 1933.

- 15) 久網晃治: 稀有なる下顎第3・第4小臼歯を有し, 同時に他の上下顎同名部に過剰歯を有する1例, 臨床歯科, 6:1730-1737, 1934.
- 16) 木村 肇: 臼歯部に6個の過剰歯を有する稀有なる1症例, 歯科学報, 49:204-206, 1944.
- 17) 榎本明義: 多数の過剰歯を有する2症例, 九州歯会誌, 19:119-123, 1965.
- 18) 後藤啓爾: 小臼歯過剰歯の3症例について, 九州歯会誌, 26:421-425, 1973.
- 19) 小川哲次, 内田武志, 岡本 莫, 今西市治: 上下顎の両側小臼歯部に7本の埋伏過剰歯を有する症例, 広大歯誌, 10:142-145, 1978.
- 20) 析原義人: 臼歯列過剰歯に関する研究(其一), 歯科学報, 40:652-664, 1935; 同(其二), 歯科学報, 40:760-782, 1935; 同(其三), 歯科学報, 40:851-857, 1935; 同(其四), 歯科学報, 41:24-37, 1936.
- 21) 佐藤峰雄: 邦人における歯数異常の研究, 日歯会誌, 30:23-41, 1937.
- 22) 星野恒夫: 人体過剰歯の左右対称性, 歯科学雑誌, 1:83-86, 1944.